

投句欄 自由律の泉 ㊼

- | | | | | | |
|----|------------------|--------|----|--------------------|---------|
| 1 | 振り下ろされた妣の平手も懐かしく | 檜 幽可 | 13 | 朝一番、夢の休憩所 | アカホリフキ |
| 2 | 次のページも妻のひとりごと | 平林 吉明 | 14 | 牙え返る まだ「思想犯」がある地球 | 金澤 ひろあき |
| 3 | 深く眠って 思い出も消す 桜病棟 | 見崎 厚志 | 15 | 初蝶迷い込む公衆電話ボックス | 野谷 真治 |
| 4 | 春陽 知らず鼻歌の朝だった | ちば つゆこ | 16 | 柚ジャム作る ほろ苦い美味そして腰痛 | 増田 壽恵子 |
| 5 | とぎれとぎれに想い出を抱きしめる | 富永 鳩山 | 17 | 昼酒の木の芽時 | 木村 浩 |
| 6 | 溶ける氷河はなんの涙か | 青井 こおり | 18 | 説明する背中にじわりと警官への恐怖 | 無 一 |
| 7 | 風にきこうか別れ道 | 佐川 智英実 | 19 | 卒業の花束を持つ笑顔の輝いて | 山本 説子 |
| 8 | また会えるね閉まる扉友の潤む瞳 | 佐瀬 風井梧 | 20 | 普通の男の寂しい背中 | 原 さつき |
| 9 | かわいいはいやらしい | 大岳 次郎 | 21 | 限りない人間の欲望氷山音たて崩れる | 小山 榮康 |
| 10 | 陽気とうらはら春という揺らぎ | 富永 順子 | 22 | これに乗らず次の電車で眠りたい | 岩井 汗馬 |
| 11 | 吐いても呑み込んで本音は苦い | 久光 良一 | 23 | 柳の芽吹き風の揺り籠にのる | 竹内 朋子 |
| 12 | しずかに用意するか下帯 | 植田 鬼灯 | 24 | 戦なき廊下細い細い三日月 | 井尾 良子 |
| | | | 25 | タンポポを胸に今日だけの勲章です | 黒瀬 文子 |
| | | | 26 | 五十回忌おじいちゃんのメガネ笑ってる | 平岡 久美子 |

27 見えてる頂 なかなか大きくならぬ 池田 恵三

28 まったく新しい人が現れた日の空の青さだ 部屋 慈音

29 花の白さ暮れなずむ風の一日 荻島 架人

30 恋猫のまばたきで夜になる 篠原 紀子

31 摘む野草ひとつなくゴミひろう 泥谷 文吾

32 忘れても畑は芽吹く 新山 賢治

33 真新しい坊主頭を叩いて少年時代に還る 白松 いちろう

34 冬来りなば夏かネ桜前線三十度 湯原 柳泉洞

35 手すり途切れてよい月に会う さいとう こう

36 散骨の海にさげぶ 三谷 宜郷

◎お詫び

前回泉②で係平岡が入力ミスをいたしました。

お詫びして訂正します。

(誤) あるものをかぞえている 植田 鬼灯

(正) あるものをかぞえていきる 植田 鬼灯

● 泉②より 一句鑑賞

粉雪舞う日はワルツと過ぐす

竹内 朋子

▼瀬戸内地方は温暖な気候で大雪が降ることはほとんどない、そんな土地柄で雪がちらちら降る日に温かな部屋に居れば心にロマンチックなワルツがかかり気分が浮く様子がよく分かる。(部屋 慈音)

青空の庭の塀 小さな蜜柑ふたつ

大岳 次郎

▼情景イメージが青空の下に浮かびますが、2つのみかんが物語の「鍵」だと思いました。(アカホリ フキ)

友だちポツポツ抜けて行った木守柿

金澤 ひろあき

▼引き算の答が木守柿。

(大岳 次郎)

底冷えの顔開く能登半島地震

野谷 真治

▼自然は、これでもかと思うほど人間を苦しめる……。新年早々の地震には、言葉を失いました。それでも被災された方々の前向きな姿勢、笑顔、そして支援、必ず光は見えてくると信じたいです。(原 さつき)

(原 さつき)

ゆっくりと老いてゆく町

無 一

▼私の住んでいる町も、老いゆく町です。暑い日差しの下に、人も歩いていない町だけが、汗をかきながら老いてゆく。さびしい事ですが、同感します。(木村 浩)

(木村 浩)

はふはふと肉まんの熱い朝を喰う

久光 良一

▼何も無い普通の日常。だからこそ幸せなんですね！ (見崎 厚志)

▼「はふはふ」のオノマトペはより熱さが伝わってきて、美味しそうに頂いておられる様子が見えてまいりました。そしてなんだか熱々の肉まんが食べたくなりました。

(山本 説子)

戦争を知らずに僕らは育つたと歌う君に乾杯

井尾 良子

▼私は少し戦争をかすめました。いまだにトラウマです、今の世界では夢かも知れませんが「戦争を知らない若者」が増えるよう願っています。

(平岡 久美子)

一日分の孤独ちよこんと座る

原 さつき

▼「一日分の孤独」とは独り身の御老態の一日のことである。遣り場のない淋しさが溢れ出た一句、通常であれば「孤独」と直接、心情を吐露したのでは、その度合いが不明確となるのであるが、「一日分」と云うフレーズによって、その度合いを明確にし、且つ「ちよこんと座る」と云うフレーズが尚一層の孤独感を伝える句である。(檜 幽可)

日本の背骨がどこかうすら寒い

黒瀬 文子

▼平和を言いつつ裏から武器になるものを渡す。共生や共存、文治で平和をめざしたいものですね。

(泥谷 文吾)

▼今の日本に不安を感じている人は多いと思いますが、それをひとことと表現できるのがすごいですね。「背骨」が効いています。

(青井 こおり)

聞けば余命も言いたげな若い医師

平岡 久美子

▼時代は変わり、今の医師はハイテク器械を駆使して、自信満々でい

う。「あなたの寿命はあと〇〇です」と。あゝ。(ちば つゆこ)

▼昔、横村先生という自由律俳人で医師の方に親しくさせて頂いた。ある時「自分の状態を診ると、あと何年かわかるよ」と淡々と仰った。医師はたぶん、自分も含め余命がわかるのでしょね。でも言われる側もねえ！

(金澤 ひろあき)

群れ離れなくてはと老は悟った

田中 直心

▼人は原始の時代から群れへの出入りを繰り返し、経験知を増やして生きてきました。出るは入るの始まりです。老いたる人の新たな道の一步に乾杯です。

(三谷 宜郷)

▼大多数が支持する方を支持してしまう多数派信仰に、私も陥りがちです。群れていると安心だけど、それも幻ですよ。(佐川 智英美)

罪の意識ユトリロの雪景色

平林 吉明

▼ユトリロは白で高名な画家。一方白で思い浮かべる画家は藤田嗣治。我が身を振り返ればユトリロの純真な白ではない藤田の白かと思う。人の心の有り様を巧く捉えた一句と思う。(佐瀬 風井梧)

▼ユトリロの白の時代に描かれた、雪の教会を思い出しました。雪の白、教会の壁の白、重々しい白です。無垢な白に潜む「罪」を感じさせます。「意識」と「雪景色」の脚韻、「ユトリロ」と「雪景色」の頭韻が美しく響きます。(篠原 紀子)

▼罪の意識がユトリロの雪景色の絵に投影しユトリロ自身のことか、それとも句作者のことなのか、どのようなことが起きたのか気になる俳句。(岩井 汗馬)

朝寝坊も治療と自解朝ドラは楽し

ちば つゆこ

▼私の場合、朝は4時〜5時頃には目覚めます。でもベッドの中で過

ごし朝ドラを楽しんでいます。それから元気(?)をもらって一日を始めています。
(増田 壽恵子)

締め切りが来たどうにもならない命

富永 鳩山

▼命の締め切りを自覚されたのだろうか。「どうにもならない」が悲しく、せまって来る。
(野谷 真治)

白旗にも容赦ない愚かで哀れな星に住む

富永 順子

▼平素、意志を感じる句には採りづらさを感じるものだ。しかし、この頃起こる事柄にはやはり、どうしても人間の幸福というのが、自己完結で済まないらしいということに対する虚しさを覚えさせないではいけない。閉じたヴァーチャルの世界で、まるで本当に世界が存在するかのように、それぞれがそれぞれの都合のいいように独裁者として存在している。そんなデジタルなデイスピアの方が、却って幸福なのじゃないか、肉体は枷なのじゃないか、とまで人々に思わせもする。愚かで哀れなことだ。
(湯原 柳泉洞)

▼戦争のない地球は来ないのだろうか。白旗を挙げた人まで攻める愚行を誰も止めることができないなんて……世も末だと諦めるしかないのか。
(白松 いちろう)

▼思いを何かで打たれるような衝撃を受けました。太平洋戦争の時でもそうでした。人間は愚かなのだろうか。永遠の平和があつてほしいと思います。
(小山 榮康)

地球の命星の命宇宙の命

岩井 汗馬

▼どうして人間は命を粗末にするのでしょうか。青い地球、輝く星々、そして壮大な宇宙。本当に宇宙が真っ暗な闇になったら。早く気がついてまず戦争を止めましょう。
(井尾 良子)

あるものをかぞえている

植田 鬼灯

▼「あるもの」とは具体的に名称が描かれていないので、読み手は作者の意図とは違った自由な解釈がゆるされ、想像の世界を楽しむことが出来ます。現実が存在する「在るもの」なのか、例えられた「あるもの」なのか、それ故に「かぞえている」という行為にわらべ歌の様な謎めいた神秘が生まれます。
(平林 吉明)

▼歳をとるにつれて、いろいろな機能が失われてゆく。あれもできなくなつた、これもできなくなつたとなると、つい落ち込んでしまいがちだが、まだできること、まだある機能をかぞえれば結構残っていることに気付く。
(久光 良一)

▼一番強くひかれましたので、選ばせていただきました。(無 一)

◎お詫び 句末尾の「いる」は、正しくは「いきる」でした。作者の植田様、鑑賞をお寄せいただいた皆様に改めてお詫び申し上げます。

●係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。鑑賞文を皆さん楽しみに待っております。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

〈送り先〉〒193・0832 八王子市散田町2・58・4

平岡久美子

メール izumi.jiyuritsu@gmail.com

※前回より投稿先のメールアドレスが変更になっています。

〈締め切り〉2024年6月20日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、自由律俳句協会のホームページや公式X、機関誌などでもご紹介することがあります。

